麦わらの一味と不思議な一週間【完】

シーシャ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家の扉がサニー号とやらと繋がったらしい。

開けると突然繋がる船上に戸惑いつつ、深く考えないでいろんな人たちとちょっとおしゃべりしてみたり。

７話完結、中編。

社会人女性が主人公。

完結しました。

目次

1．ベッドルームへの扉 ―― 1
2．浴室のドア ―― 4
3．玄関扉 ―― 7
4．押入れの襖 ―― 11
5．トイレのドア ―― 15
6．クローゼットの扉 ―― 20
7．ベランダのガラス戸 （完）

1．ベッドルームへの扉

部屋に戻ると他人がいた。
「あ？だれだお前」
「ウオッフ！失礼しました」
部屋の真ん中でトランプをしている男の子２人と犬？みたいな動物がいた…。人がめちゃくちゃくつろいでる所に邪魔してしまったと急いでドアを閉めて思い出した。失礼しましたっていうかココ私の部屋じゃね？
「ってことはあの人たちってドロボー？」
泥棒のくせに部屋でくつろいでるとかどういうことだ。しかもなんか香ばしく焼いた肉のいい匂いとかしてたし。人ん家でＢＢＱとか許せん！私なんて給料日前で毎食ＴＫＧだってのに！
「ゴルァ！不審者ども！人様ン家で何くつろいで……おや？いない？」
再度開けた扉の先には見慣れた自室があった。もちろん誰もトランプなんてしてくつろいでいないし、肉の匂いなんてのもない。まさかどこかに隠れているんじゃ、なんて思うけど小さな部屋に隠れる場所なんてないし、部屋の真ん中には人が座っていたよ

うな床の暖かさもなかった。
「……え、待って。そもそもこの部屋床に何人も座れなくない？」
部屋の真ん中にはローテーブルがあるし、人をダメにするあのソファもあるし、ベッドもタンスもある。しかもたしかあの人たちって床に直に座ってトランプしてて…でも、そんな空間どこにもない……？
「げ…幻覚とか初めて見たわ…あはは…」
乾いた笑い声が口から漏れたけど、内心ガタブル震えてます本当にありがとうございます。幽霊かぁ…幽霊とか初めて見た…あんなリアルに見えるもんなんだなぁ…。身体中に出た鳥肌をさすりながら早く寝てしまおうとベッドに向かって、枕の上に見慣れないものを発見した。
「……なにこの帽子…」
所々繕った跡やくたびれたところのある、赤いリボンがついた麦わら帽子がちょこんと枕に乗っていた。まさかこれも幻覚だろうかと目をこすってもなかなか消えない。思わず辺りを見回して幽霊がいないか確認したけれど、この帽子以外に何の異常もない。指先で突いて、その後おそるおそる持ち上げた麦わら帽子は、思ったままの重さや手触りだった。
「窓から入ってきた？ってこともないだろうし…誰のだろ？まあいっか。今日はもう寝

ちゃおう…」

幻覚のせいでどっと疲れた。麦わら帽子を適当にタンスの上に放置して早々に布団に潜り込んだ。ＢＢＱ…いいなぁ…ひもじいなぁ…。給料が出たら絶対に肉を買って焼いて食べよう、そう決意した。こうして私の奇妙な一週間は幕を開けたのだけれど、この時の私が知るよしもなかった。

2．浴室のドア

今日も疲れた。仕事が後輩の手違いで長引いてしまったし、駆け込んで飛び乗った電車は超満員だったし。後輩もなぁ、メモ取るとかもうちょいやる気を見せてくれたらこっちのモチベーションもだだ下がりしないのになぁ。同じことを何度言ってもメモ一つとらず、失敗しても黙ってハイハイ言うだけじゃお手上げだっての…。人を育てるって大変だししんどいばっかりだ。

「あーあ、私も気楽な新人に戻りたいよーぉ」

泣き言を言いながら素っ裸になって風呂の扉を開けた先に、とびっきりのボンキュッボンなお姉さまがいた。

「あら」

「しし失礼つかぁした!!!」

ッパーン!と、扉をスライドさせて閉めた。え、何今の?なんか、同じ人間の女と思えないほどのとびっきりのナイスバディでグラマラスなエキゾチックなお姉さまがいた!?えっもしかして私、家を間違えた?急いで着ていた服を着直して表に出ると、間違

いなく私が賃貸してるマンションの、私が借りている部屋番号で合っていた。というかそもそも鍵が合っていて部屋の家具が同じ時点で間違いなく私の家だった。だというのに、なぜ他人が？

「ハッ…まさかメンヘラ女性が彼氏の家と間違えてコッソリピッキングして侵入し、彼氏のいない間に彼女みたいになりきろうとシャワーを浴びていた最中だったとか…？」

どこの昼ドラだと思う余裕もないぐらい突飛なストーリーが私の頭に浮かんだ。しかも疲れた私の頭ではそれが一番ありえることだと思い込んでしまった。なのでメンヘラ＝包丁で刺してくる、という法則のもとに盾代わりのフライパンを携え、再度風呂に向かった。しかし風呂場からは湯気も洗剤の匂いもなく、深夜の暗さしかなかった。

「ええ……どういうこと…？」

目も覚めるほどのとびっきりの美女が消え、あるのは普通の風呂場だけ。扉を開けても濡れた気配なんて全くない。まさか幻覚でも見たのだろうか。

「あっ、そういえばこの間もなんか幻覚見たわ…。疲れてんのかな…」

どうせ明日は休みだし、今日はさっさとシャワーを浴びて早く寝てしまおう。性別や見目が麗しかったからか、前回のように幽霊だと怯える気持ちもほとんどなかった。むしろ眼福だと拝みたいぐらいの驚くべきナイスバディだった。また見れるものなら見させてもらいたい…。

「でも今度は目も覚めるほどのイケメンがいいなぁ…」

布団に入って己の欲望を口にした。枯れた生活に潤いというなら美女とイケメン、これに限る。できればハリウッドスターバリのイケメンで頼む。ぐふふと笑いながら夢の世界に旅立つほんの一瞬、あることが脳裏に浮かんだ。そういえば私、いつも換気のために風呂場の扉を開けてたのに今日は閉まってたよなぁ。なんでだ？

3．玄関扉

「あっどうも」

「ヒィエエエエエ!!!」

目の前にドクロが現れて速攻扉を閉めた。幻覚だ、また幻覚を見たんだ、と頭を抱えてうずくまる私を咎める人はいない。だって深夜の玄関前だもの。人っ子一人いねぇ。

「あっ…あっ……なんでドクロ…なんで…」

ありえないものを見た＆恐怖で鳥肌と体の震えが止まらない。エンドレス恐怖。腰が砕けて座り込んだ廊下は現代社会よりも冷たかった。今までのパターンは自室や風呂場など家の中の扉を開けたタイミングだったから、最近は扉を閉めきらずに対策していたというのに。今回はそんな努力をあざ笑うような、まさかの玄関トラップ。しかも間近にドクロ。ふざけんな、本気で仰け反って悲鳴あげたわ。

「あのー、大丈夫ですか?」

さすがに深夜とはいえ悲鳴がうるさかったのか、誰かが気遣うような声をかけてきた。ご近所さんだろうか。迷惑をかけてすみませんという気持ちよりも、誰か他人がい

てくれて心底助かったという気持ちで顔を上げた。
「たっ…助けてください…ドクロが家の中に…！」
「えっドクロ!?どこに!?」
「私の家の中……に……」
目の前にドクロ、再び。嫌がらせのように間近に接近しているドクロが、ドクロのくせに表情豊かに気遣うような顔をしてる。でもドクロ。されどドクロ。
「ヒェッ」
私、死んだ。

ーーーーーーーーーーーー

「あれ?生きてる」
ぱちぱちと瞬きをして呟いた言葉も、持ち上げた自分の手の感覚も至って普通だ。むしろ寝起き感満載。やたらとスッキリ感じるのはもしかしなくても熟睡したからだろうか。ということはあれは夢?
「なぁんだ、夢かー!生きてるって素晴らしい!」
「ヨホホ。いやまったく同感です」

「ですよねーーーーってドクロおおお!!!」
「えっ!?どこに!?」
「アンタだよ!!!」
　なんだこのドクロ！怖い！恐ろしいほどにノリツッコミがすごい！
「もう帰りたい…家に帰らせてええええ…」
「あ、ご自宅でしたらそこの扉から帰ることができると思いますよ」
「え!?」
「扉の開け閉めに関する能力ではないかとルフィさんたちから聞いていましたから、もしかして、と思いましてーードアストッパーつけてます」
「仕事のできるドクロだった!!!」
「えっドクロ!?」
「いや、もうそのくだりはいいんで。…あ、本当に廊下と繋がってる。いやー、ありがとうございます。無事家に帰れそうです」
「それはよかった。あ、お礼にパンツ見せてもらえませんか？」
「オイなんだよこのドクロ。ドクロな上に変態かよ」
「ヨホホ。気をつけてお帰りくださいね」
「ドクロに気をつけてとか言われるとなんか不吉…。でもまあ、お世話になりました」

「ええ。こちらこそ、噂のお嬢さんからお話を聞けてよかったです。またいらしてくださいね」
「あはは…まあ、機会があれば」

4．押入れの襖

「うおっ!?……あ、どうもこんにちはー」
押入れを開けたら緑の髪の人が馬鹿でかいダンベル持ってた。うわでっかー!すごー!でもガラ悪いー!
「……誰だお前」
「高嶺と申します。えーと、こちらってサ…なんとか号って名前のお船ですかね?」
「敵か」
チャキ、と音を立てて構えてるそれはまさかＫＡ・ＴＡ・Ｎａってやつか。いやいやいや、やめてやめてそんな殺生沙汰とか…え、冗談、だよね…?
「違いますって!え、刀!?いやいや人にそんなん向けちゃダメでしょ!直しましょう!ほら!どうどう!」
「…お前、うちの音楽家見てぶっ倒れたとかいうやつか?」
「は?音楽家?」
「ガイコツの」

「あー、あのアフロの？ってかあの人音楽家なんだ…えらいインパクト強い音楽家だな…いや、そもそも成仏せずに生きた人間の仲間になってる時点でだいぶアレだけど…」
「なるほど。話には聞いてたが、本当にただの女なんだな」
「はあ…まあ、普通の女ですけど。てか今日はドクロさんはどちらに？」
「下で何かしてんじゃねえのか？」
「下？あー、そっか、扉ここだけだから無理か…。えっとですね、前に倒れたところをお世話になったんで、コレ…よかったら渡してもらえませんか？」
　テーブルの横に置いてた紙袋を持ってきて、マリｍ……ガラの悪い兄さんに渡した。
「なんだこりゃ？」
「パンツです」
「はああ!!?」
「なんかパンツ見せろって言ってたんで、パンツに未練を残して死んだのかなぁって…。あ、ちゃんと新品買ったんで大丈夫ですよ。とびっきりセクシーな紐パンにしておきました。男物の！」
　選ぶの超楽しかった。材質はテッカテカのエナメル生地。ど変態ここに極まれりって感じのやつ。
「なんでだよ!!!なんかもう全部がおかしいだろ!!!」

「それ言うならドクロが立って動いて喋ってる時点でもうおかしいですしね!?」
「確かに」
「まあそういうわけなんで。よろしくお願いしますー」
「おい」
「はい？」
　なんだ、もうパンツはないぞ？
「酒とかはねェのか？」
「酒？買いに行けばありますけど」
「よし。なら次は酒とか持ってこいよ」
「あら、イケる口ですか？でも残念なことにいつウチと繋がるか分かんないんですよね」
「だからなんだ？」
「いや、四六時中酒瓶担いでおくわけにもいかないんで。あ、そのパンツは小さかったから別口ですよ？」
「チッ、仕方ねェ。ならできるだけ持っとけよ」
「了解です。じゃあ代わりに私にも何かお土産とかくださいよ」
「みやげ？……あー……何がいいんだ？」
「おっ、くれるのか。じゃあ美味しいツマミでも用意しといてください。あとこっちで

のオススメの酒とか」
「分かった。楽しみにしとけ」
「あはは。りょーかいです！」

5．トイレのドア

「うおっ!?」
「…っ!!!びっ…びっくりした!!!」
　まさか扉を開けた先で他人の驚く声を聞くなんて思いもしなくて、飛び上がるほど驚いてしまった。だってまさかトイレから出た瞬間とか。ないわー。後ろで水洗トイレがまだ流れてるんですけどー。やめてー。
「それはコッチのセリフだぜ、お嬢ちゃん！…あ、タカミネってあんたのことか？」
「ああ、はい、高嶺りんです。サなんとか号の方ですよね？」
「サウザンドサニー号だ。間違えんなよ」
「失礼しました。今日は…やっぱり同じ人はいないのか…」
　いやまあどうせトイレ入るのにマリモさんに渡す用の酒とか持ってなかったから別に全然いいんだけど。ふむふむ、なるほど。
「ん？なんだ？」
「いえ、なんとなくこの現象の法則が分かってきまして。いつも違う扉からだとか、同じ

人には会えないとか、扉を完全に閉めたら切り替わるとか、日時は不明だけど必ず私が一人の時に起きるとか」
「ほー。なるほどなァ。そういやルフィ、ウソップ、チョッパーの3人が居た以外はそっちと同じ法則だな」
「え、誰ですって？」
「うちの船長と狙撃手と船医だ。麦わら帽子のやつと鼻の長いやつ、それからトナカイだな」
「トナカイ？は？トナカイ？」
「おう。しかも船医だ！」
　この人は一体何を言っているんだ???
「……？…??……え、はぁ？…あー…ドクロが音楽家だからトナカイが船医もありえる…？…ああ、あの犬みたいなのはトナカイだったのか…？」
「でもって俺は船大工だぜ!!!」
　なにそれ???
「船大工？船に乗ってるのにまだ船作るんですか？」
「いや、船の修理や改造なんかだな」
「なるほど、餅は餅屋ってことですか。構成メンバーも考えられてますねぇ」

「だろ？」
　そろそろこれが私の夢まぼろしじゃないとは分かりつつ、なんとなく現実を直視するには難しすぎる案件なのでスルーしてた。うーん、まともに考えても無駄っぽいし。
「ところでお嬢ちゃんの後ろにあるのはなんだ？」
「あー…トイレです」
「ほう？ちょいと見せてくれねぇか？」
「え…変態？」
「バッカ！褒めんなよ！」
「ガチの変態さんか!!!嫌ですよ！うちのトイレに何するつもりですか!?」
「心配すんな、壊しゃしねェよ。アンタの所のトイレがどんな造りなのか見るだけさ」
「ああ、そういう…。じゃあどうぞ」
「悪いな。…貯水してレバーを引くことで水を流すってのは変わらねェか。このボタンは何だ？」
「ああ、水量を変えたり便座を温めたりできるんです。あとお尻を洗ったりとか」
「尻を洗う!?」
「私も使ったことがないんですけど、ここからノズルが出てきて、水鉄砲みたいに水が飛び出てくるんです。大便の後とかに使う人もいますね」

「はー…そうか、なるほどな！ちょいと試しても構わねェか？」
「ああ、じゃあ何か水を受ける物とかあります？」
「これでいいだろ。もう処分する木端だ」
「じゃあどうぞー」
「おう！」
　悪いな！と超笑顔で一人暮らし用の狭いトイレに巨体を捻って入る変態……やだ、なんか悪夢みたい…。
「……おお…おお!!!!うおお!!!!なるほど、距離や水圧も加減されてんのか！」
　外人さんがウォシュレットで感動するって本当だったんだー。
「見て分かるんですねぇ…」
「当たり前だ。…いやあ、なかなかいいもん見せてもらったぜ！ありがとよ！」
「トイレでそんなこと言ってもらえると思いませんでした。どういたしまして。じゃあ私はそろそろ帰ります。あ、そうだ、緑の髪の人にお酒を渡すって言ってたんですけど、好みのお酒とか聞くの忘れてて。ご存知ですか？」
「ゾロの好みか…。辛口で旨味のある米から作った酒とか好きだと思うぜ」
「じゃあ日本酒でいけますね。了解です！あ、お兄さんはお酒とか好きです？」
「おう。だが俺はコーラの方が好みだな」

「コーラですか！へー。じゃあ持って来れそうなら一緒に持ってきます」
「ありがとよ！じゃあ気をつけて帰れよ」
「あはは、ありがとうございます。さようならー」

6．クローゼットの扉

　クローゼットを開けると女の子が男に襲われてた。突然のことに頭がついていかないままだったけど、一瞬目があったその女の子が助けを求める目をしていたから、私は手から下げていた袋から酒瓶を取り、大きく振りかぶった。
「で、りゃああっ!!!」
「っ…がっ…!」
「はぁ…はぁ……だ、大丈夫…!?」
「ええ…!ありがとう、助かったわ…」
「よかった……とりあえず、こっち来て、隠れよう」
　女の子の手を引っ張って、私の部屋に連れ込んだ。あ、土足…まあいっか。
「…あなた、タカミネ＝リン？」
「うん。あなたはサウザンドサニー号の人だよね。ってことはこの人も!?」
「違う違う。たぶん外でのドンパチに紛れて来た侵入者よ」
「そっか、よかった…いや、良くない！え、どうしよう、外に放り出す？それともあなた

がこっち来る？」
「放り出すことにするわ。ちょっと手伝ってもらってもいい？」
「うん。よいしょ…くっそ重いなこの人…」
「よっ、と。…あ、サンジくーん！コイツ侵入者なんだけどどっか捨てといてくれない？」
「はァいナミさん！喜んでー!!!…えっ、なんて素敵なお姉さま!!!」
　金髪の男性がくるくる踊りながら近寄ってきた。おお、すごい身軽。てか素敵なお姉さまってもしかして私？やだー、照れるー。
「サンジくん、彼女がタカミネ＝リンって人らしいわ。片付けが終わったらルフィたちも呼んでおいてくれない？」
「もっちろんですー!!!素敵なお姉さま、また後ほどお話しましょう〜!!!」
　気絶した人の足を掴んで軽々と引きずりつつ、サンジくんとやらは走っていった。見かけによらずワイルドだなぁ。
「なんか…インパクトの強い人だなぁ…」
「あははっ！確かにそうよねぇ！ね、改めてお礼を言わせて。あたしはナミ、この船の航海士なの」
「ああ、ご丁寧にどうも。高嶺りんです。職業はＯＬです」

「ＯＬ？」
「小さな会社で経理とか事務作業をしてます。…ってそこ怪我してる！」
　ナミちゃんとやらの手の甲に小さな傷ができていた。血が滲んで痛そうだ。
「え？ああ、平気平気！これぐらいしょっちゅうだし」
「いやいや、ダメだって！ちょっと待ってて、救急箱取ってくるから！」
「…へぇ、ここがリンの家？」
「うん、そう。あ、こっちで手の傷口を洗って。んで濡れたままでいいからこっちに来て」
「うん」
　土足だと気付いたのか、靴を脱いで向こう側に投げた後、ナミちゃんは洗面台で手を洗っていた。その間に消毒液と絆創膏を用意した。あんまり怪我することなんてなかったから、中身はたっぷり残ってるし、期限も……あっ、そろそろ切れそうだわ。気付いてよかった。また今度新調しとこう。
「ごめんね、ちょっと染みるよ」
「平気。わざわざありがとう」
「ううん。……あっ、そういえばそっちって船医がいるんだっけ？勝手なことしちゃったかな…。なんならちゃんとプロの人にやり直してもらってね」

「ありがと。あなたいい人ね」
「いやいや、普通だよ」
「って…あーっ！ルフィの帽子！こんな所に!!!」
「え、帽子？ああ、これってそっちのだった？」
「そうよ！うちの船長の帽子なの！見つからないと思ったらこんな所にあったなんて！」
　嬉しそうにタンスの上に置き去りにしてた麦わら帽子を手に取っていた。うんうん、持ち主の所に戻りそうでよかったよかった。
「あー、なんかごめんね。いつの間にか部屋にあったから、ついつい置きっ放しにして」
「ううん、うちのヤツも何も言わなかったんだろうし、仕方ないわよ」
「そう言ってもらえるとありがたいや」
「んナミすわああああんっ!!!お姉さまぁ～ぁっ!!!」
「あ、サンジくんだ。じゃあ一緒に行きましょ」
「うん。あ、そうだお酒！」
「酒がどうしたの？」
「緑の髪の人にお酒渡すって言ってたんだけど、さっき割っちゃったから。ちょっと台

所にあるやつを持ってくるね」
「分かったわ。じゃあ先に行ってるわね」
「うん。って、ああっ！」
外に出て扉を閉める。それは私もそうだけど、彼女にとっても普通のことで、何気ないことだったんだろう。でも、私たちの場合、閉めてしまうともう繋がらない。駆け寄ってクローゼットを大きく開け放ったけれど、もう手遅れだった。
「またお酒渡せなかったや…」
ナミちゃんを助けるために仕方がなかったし、全然そのことは後悔していない。
でも、私はいつまで部屋の中で酒瓶を担いでいればいいんだろうか。
あとコーラも。
ナミちゃんにも悪気がなかっただろうし仕方がないとはいえ、大きなため息が溢れてしまった。

7．ベランダのガラス戸　（完）

雨が続いていたから久しぶりに外に洗濯物を干せる。しかも休日に。ああ幸せ！

「今日も元気だいい天気～♪洗濯物がよく乾くぅおおおお!!!」

ベランダへのガラス戸を開けた瞬間、目の前に長い鼻の男の子が現れた。なんで!?今どこにいたの!?

「うおっ!?誰だお前……あ、あんたタカミネ＝リンか」

あっ、よかった、ベランダに潜んでた不審者とかじゃなかった…。きっとサニー号の人だろう。

「え、うん、そうだけど…あ、ちょうどいいところに！コレコレ、先に渡しとく！」

「ん？何だこりゃ」

「お酒とコーラ。なんかリクエストされたから」

「そりゃわざわざすまねェな！そういやゾロとフランキーがアンタに会いたがってたぜ。っていうか他のやつらもだけどよ」

「あらまー。ありがたいこっちゃ。でもこの部屋も…他に扉ないし無理だねぇ」

一回使った扉が使えないって法則っぽいし、一つの扉を開けている間に他の扉を開けても無理っぽいし。男の子のいる部屋にも他の部屋へと通じる扉はなさそうだから、きっと無理だろうなぁ。

「ああ、そういや扉と扉で繋がるんだったか。コントロールとかできねェのか？」

「無理無理。この間なんかトイレ出た途端にフランキーさんとご対面だったし。恥ずか死ぬわ」

「あー…それでフランキーのやつがトイレの改造とか始めてたのか…」

「船大工ってなんでもできるんだねぇ…」

何でも屋さんだ。船大工っていうより日曜大工のお父さん？

「そんで、その持ってるやつは何なんだ？」

「洗濯物。ベランダで干そうと思ってガラス戸開けたら開通しちゃったからさぁ」

「ん？そのガラス戸ってのはドアノブ捻っての開閉式か？」

「ううん、スライド式」

「で、ガラスってことは向こう側が透けてるわけだろ？今は俺の部屋が見えるわけだよな？」

「うん？……え、いや、ベランダあるんだけど。え、何で？え？はァ!?」

「おっ、落ち着けって！」

スライドして外に通じるはずの方は男の子の部屋に通じていて、ガラス戸が二枚重なっている方からは外がちゃんと見えている。なにそれ？なにが起きてるの???
「ちょっとそっち行っても構わねえか？」
「あ、どうぞ。あ、靴脱いでね」
「おう。……本当だな、確かにガラスの向こうは外の風景だ。俺の腕も透けて見えねェし…一体どうなってんだ…？」
「そういえば法則があってね。毎回違う扉からで同じ人に会わないとか、私が一人の時だとか、扉閉めると途切れちゃうとか」
「確かにサニー号のあちこちでお前が出たって聞くけど、同じ部屋ってのはなかったな…。でもよ、俺はアンタと会うのは2回目だぜ？」
「えっ、そうなの!?」
「部屋で俺とルフィとチョッパーとでトランプしてた時に…」
「ああ！」
そういやいたわ！そろっと本人に気付かれないように横に回ると、たしかに見覚えのある長い鼻が！
「…ああっ！そういえば鼻の長い子がいた！」
「おい！わざわざ横から確認してかよ!!」

バレてた。

「ははーん…じゃあ毎回別の人って線は消えたか…」

「もう全員と会ってるからなぁ。２巡目が始まったとかじゃねえのか？」

「それもあるかも…。でもそれを言うなら私の家の扉とかもうないから、これっきりで終了になるかもよ？」

「えっ、マジかよ！ああー…あいつらもガッカリするだろうなぁ。……あ、でもよ、このガラス戸みてェに扉っぽくねェ扉からって可能性もあるんじゃねえか？ホラ、例えば食器棚とか！」

「まっさかー！それこそナイナイ！」

むしろそんなところが通じて、手だけとか目だけとか見えたら、私の心臓が死ぬ。ホラーは苦手なんだよ…。

「いやいやいや、万が一があるかもしれねェじゃねえか」

「うーん…じゃあ万が一があったら、ちょくちょくお世話になったって船長さんにご挨拶したいなぁ」

「そりゃいいな。ルフィもアンタに会いたがってたし、きっと喜ぶぜ」

「あはは。じゃあ、また次があったらよろしくねー」

「おう。こいつもありがとな！」

「いえいえ。マリ…緑の髪の人とフランキーさんとナミちゃんとサンジくんと…まあ、みなさんによろしくねー！」

かくして、私の奇妙な一週間は幕を下ろした。何しろ一人暮らしの小さなアパートには、もう扉がないからね。麦わら帽子の船長さんや、トナカイの船医さんたちともお話ししてみたかったなぁ、なんて思ってたらまさかの2巡目が始まったりするんだけど。それはまた別のお話。